続 徒然つれづれ

街・町・まち

桑野　巍

創刊して20年余りになる同人雑誌（年１回刊）がある。同人（約40人）はみんな作文が好きな人たちだ。毎回テーマを決めて思いの丈（たけ）を執筆するエッセー集なのだ。字数は2,000字以内、誌名は「はなみち」（発行所は東京・渋谷区）で、私も会員の末席を汚している。先ごろのテーマは「街・町・まち」だった。

会員たちの作品はさすがと思える力作、労作揃いで、いつも感銘を受ける。同時にわが身の文才の無さを恥じる。会員の中には劇作家もいれば編集者、高校教師、声優もいて多士済済だ。都立高校の教師が生活実践室で、男女２人の生徒との対話をコメディ風にまとめ、放課後３人でまちの和風レストランに入って「まちの良さ、悪さ」を語っている作品は興味深かった。そこでいくつかの作品をダイジェストしてみることにした。

横浜市に在住の女性会員は自分が住んでいるまちの歴史を振り返り、江戸幕府が安定した17世紀のころからの模様を紹介、安政元年（1854年）ペリー率いる黒船の上陸から横浜開港とその発展ぶりを綴り、今日の住宅、商店、スーパー、コンビニの賑やかさや住み易さを事細かに表現し、自分の住んでいるまちに愛郷心を持とうと呼びかけていた。

また、最近はあまり聞かれなくなった童謡唱歌を想い出したという女性会員は、“あの町この町日が暮れる、日が暮れる、いま来たこの道帰りゃんせ…”が脳裏を去来したと前置きして、ご自分が転々とした十指に余る大小の町が堰を切ったように浮かび上がってきたことを表現していた。父の転勤、その後の夫の転勤で一家は引っ越しの繰り返し、自身や子供たちの転出入学を紹介しながらも生き生きと生活してきた様子を克明に記し「あのまちあの村、みんな懐かしい」と結んでいた。

海外での生活が長かった会員は上海、台北、メキシコ、ロサンゼルスで経験した異国のまちでの生活を自慢しながら、グローバル社会を生き抜いたが「やはり日本国東京がベスト」と結び、好感がもてた。持ち家40年余りになるが、海外生活中は空き家状態で、家の傷みと修理の手間が悩みとご不満を描写していたことにペーソスも感じた。

最寄り駅から自宅まで徒歩15分という会員は商店街通りの右側は酒屋から始まってパン屋、美容院、薬屋、肉屋、駄菓子屋、そば屋、テーラー、豆腐屋など細かに説明、左側は靴の修理屋、理髪店、米屋、茶販売店、すし屋、八百屋、魚屋など自分たちの日ごろの生活には困らないらしく、この通りを勝手に「栄通り」と名づけたという。そこは流行りのシャッター通りではなく、いつも通りに臭いがあるそうだ。しかも、通りの店、客と顔見知りになって一つのコミュニティができている、と自慢げに書いていた。

人々はみんなまち、むらに住んでいる。そして生活している。そのまちは大規模のものもあり、地方のささやかなまち、むらもあるだろう。この「街・町・まち」の企画は自分たちの住んでいるまちを改めて見つめる機会を与えてくれた。ねぐらサラリーマンだったせいか、自分の住んでいるまちのことを知らなかった私にこの作文集は「大いなる反省」をぶっつけてくれた。

首都圏ではいまも畑や田んぼ、雑木林が住宅やショッピングセンターに早変わり、道をつけ電車を増発させ、自然が後退し自然との共生が難しくなっているが「ああこれが現代か」と嘆く作品もみられた。米屋が倉庫ともども店を閉め、コンビニ店に早変わりしていく姿を垣間見て栄枯盛衰を感じ取ったという会員は昔を振り返り、早朝の納豆売りの声や豆腐屋のラッパの音が耳に残っていることを取り上げていた。そして車社会や会話のない無味乾燥の大型店を滑稽な現象と表現し「ノスタルジアと笑われるかも」と結んでいた。

それでは一会員である私はどんな作品をものしたのか。書くことは好きでも文才を持ち合わせないので「自分のふるさと」を紹介したに過ぎず、恥ずかしい次第だ。全体を拝読して、そのまちの行政努力を認めるような、あるいは要望、提言めいた作品には出会わなかったが、みんな「いま幸せ」を実感しておられ、ほのぼのさとさわやかさを感じ取った。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）